

特色ある授業開発のひとつのこころみ

—「合宿ゼミナール」実施報告—

中野和朗

1 「合宿ゼミナール」実施へのプロセス

「カリキュラム応用設計研究開発分野」の初年度（1996年）の研究計画の中に「外国語以外の分野における、本学の地理的・地域的条件を活用したユニークなカリキュラムの研究開発」が挙げられている。その具体的内容のひとつに「恵まれた自然環境と各地に設置されている附置施設を活用しての小人数でのフィールドワークと合宿ゼミによる人間教育、教養教育を中心とする教育方法の研究開発」ということが記されている。

カリキュラム応用設計研究開発分野では、この計画に則して検討をすすめ、試行的に平成9年度の共通教育カリキュラムの新入生ゼミナールの授業科目として「合宿ゼミナール」を実施することとなった。

この「合宿ゼミナール」実施のモチベーションとなっているのは次のようなことである。

人間は有史以来文明の進展に努めてきた。そして、文明の恩恵をほしのままにしている。しかし、一方で、文明の進展とともに人間の本来の野生的生命力の減退化が進行している。したがって、今日的な教育の重要な課題として、教養的、知的能力の涵養と並行して、というよりも、それ以前にこの劣弱化している人間の本来の活力の回復への手だてが考慮されねばならないのではないか。少子化の中で過剰に保護され、電話、テレビ、パソコンを備えた個室をあてがわれ、このいわば密室の中で受験勉強に追われてきた学生の多くは、人間が本来持っている創造力や社会性を失いかけているのである。だとすれば、文明に病んだ状態で大学にやってきた新入生たちに先ず必要なのは、これへの対症療法であろう。人と人、人と社会、人と自然との連がりや断ち切れ、自分の存在が何か分からなくなった人間に必要なものは、なによりもコミュニケーションの回復である。

このような認識がモチベーションとなって新入生ゼミナールの授業のひとつとして「合宿ゼミナール」が開設された。因みに、平成9年度共通教育授業案内には次のように記載されている。

- 1 授業の狙い：人と人との触れ合い、人と自然との触れ合いを通して、もっとも本質的な人間性を涵養し、自立と共生について考え、大学における学習の意味と学問の方法論について学ぶ。
- 2 授業の概要：メインテーマはコミュニケーションである。ゼミナールの全期間キャンプと野外炊飯による共同生活を基本とする。授業は講義と演習、フィールドワーク、実習を併用し、小人数による対話と討論を通し、学識を深めるとともに人間の本来の創造性や社会性を体験的学習を通して涵養する。
- 3 成績評価の方法：レポートと全期間の学習を総合的に評価する。
- 4 履修上の注意：①通常の授業期間ではなく、夏期休業期間中に3泊4日の日程で実施

する。②本年は9月18日(休)～21日(日)に高遠少年自然の家の施設を利用して行なう。③全期間を通じて食料費、テキスト代等の実費として5,000円程度(見込み)が必要である。④履修希望者にたいするガイダンスを事前に行なうので掲示に注意すること。⑤定員は約25名である。希望者が多い場合は抽選とする。抽選となる場合は掲示により知らせる。

5 授業計画：

- (1) 講義、①コミュニケーションとは何か。
 ②人と人のコミュニケーション。
 ③個と社会のコミュニケーション。
 ④異文化間コミュニケーション。
 ⑤人と自然のコミュニケーション。
 ⑥人と宇宙のコミュニケーション等の内容について行う。
- (2) 実習・フィールドワーク、
 ①合宿という共同生活を通して、人と人、人と社会(集団)のコミュニケーションについて体験的に学習する。
 ②キャンプと野外炊飯という生活を通して、電気、ガス、水道といった文明の利便に依存しない生活の方法、知恵について体験的に学習する。
 ③フィールドワークは、自然(山と川)の中に踏み入って、自然の幸を採取しながら人と自然のコミュニケーションを体験的に学習する。施設に附置されているプラネタリウム、天体望遠鏡により、天体を観察し、人と宇宙のコミュニケーションについて実習する。

2 授業はどのように行なわれたか

「合宿ゼミナール」のシラバスに拠って履修を希望し「受講票」を提出した学生は97名にのぼった。7月22日(火)、ガイダンスが行なわれたが、その席で、受講希望者と相談の上、抽選により45名にしぼることにした。その結果、男子学生24名、女子学生21名となった。その学部別内訳は次のとおりである。

学部	人 文	教 育	経 済	理 学	医 学	工 学	農 学	織 維	計
男 子	3	2	2	1	0	10	2	4	24
女 子	8	3	0	3	1	1	2	3	21
計	11	5	2	4	1	11	4	7	45

さらに全体を8班に分け、各班ごとに話し合いの上班長を決めた。班の編成には、男子、女子の割り合いがほぼ均等になること、なるべく多様な学部生の混成となることに留意した。受講生に配布された「合宿ゼミナール」授業日程表は次のとおりである。

「合宿ゼミナール」授業日程表

場所 国立信州高速少年自然の家

月 日	時間																
	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
9月18日(木)	集合 (共通教育センター玄関前)			移動 車中 オリエンテーション			昼食 [食堂]	ゲーム (緊張を はぐし、 連帯感を 養う)			講義	夕食 [食堂]		星とのコミュニ ケーション 天体望遠鏡を 見る [スタードーム]		就寝 入浴適宜	
9月19日(金)	起床	朝食 [食堂]		講義 (人間と 食につ いて) [研修室]	手打ちそば講習 [研修室]		昼食 (そばを 食べる)	キャンピング について学 ぶ (テントを張 り、火をお こす等) [移動テント サイト]			夕食準備 (カレーを 作る)	夕食 (カレー コンテ スト)	夕べのつどい		就寝 入浴適宜		
9月20日(土)	起床	朝食及び昼食用 のおむすび作り		きのこ の話 きのこ取り (各グループで適 宜昼食をとる) [自然の家活 動エリア]			夕食及び打ち 上げコンパ (きのこ汁、 岩魚焼き等)			キャンプ ファイヤー		就寝 入浴適宜					
9月21日(日)	起床	テントの 撤収	朝食 [食堂]	まとめ (レポート 作成) [研修室]			昼食 [食堂]	移動	解散								

(1) オリエンテーション

①班編成の確認：名簿配布，班単位学習活動について，②班長会の設置（全体的学習活動の円滑化，連絡事項の伝達システムとして），③日程説明，④施設使用上の注意事項，⑤授業運営上の留意点（ゼミ全体の活動の中での個人の関わり方について，とくに禁止事項は設けない。各自の又は班毎の自主的，自律的行動を尊重するが，ゼミ全員の集団的学習活動との関連を念頭におくこと）。

(2) 講義「コミュニケーションとは」概要

① コミュニケーションとは何か

人間の類的属性のひとつである社会性の必然的産物。情報の発信と受信。相互理解のプロセス。地球の全生態系（自然）の中の人間存在，宇宙の中の人間存在への認識。コミュニケーションの手段，メディア。言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション。多様な対象に相応した多様なコミュニケーション。

② ひととひと，個と集団（社会），集団と集団のコミュニケーション

あいさつ。社会的活動に必要なルール，法。風俗・習慣。個と全体（個的自由と社会的規制）・国家と国家（民族と民族）。国家（民族）と地球。国際化とコミュニケーション。相互交流，相互理解。異文化理解。

③ 自然とのコミュニケーション

自然現象のメッセージ。植物，動物，菌類からのメッセージ。森とのコミュニケーション。自然観の転換。自然の中で生かされている人間への認識。

④ 宇宙とのコミュニケーション

星・月・太陽にかかわる物語（ギリシャ神話，メールヘン，かぐや姫，七夕のはなし等々）。宇宙の神秘性と宗教（星占い）。科学技術の発達と宇宙との交流。宇宙時代と地球。

共生の哲学。価値観の転換。

⑤ 芸術、文化、非言語のコミュニケーション

非言語コミュニケーション。音楽、美術、映像、演劇とコミュニケーション。食物、衣服、住居とコミュニケーション。

(3) 実習・フィールドワーク

授業スケジュールにしたがって次のようなことを行なった。

① 天体望遠鏡で星を観る

第一日目、夕食後、午後7時より。2名の天体観測指導員（ボランティア）から附設のプラネタリウムにおいて講義を受けた後、附設天文台において天体観察を行なった。（宇宙とのコミュニケーションとの関連）

② 手打ちそばを打って食べる

二日目、午前9時より1時間、「人間と食について」及び「そば」についての講義。10時より研修室にて、手打そば講習会。講師から実演により、水まわし、こねる、もちにまとめる、のばす、切る、ゆでるの手順の指導を受け、各班ごとに1.5kgの粉をそばにした。昼食は、自分達で打ったそばを食べた。（食文化のコミュニケーション、共同作業により個と集団のコミュニケーションとの関連）

③ キャンピングについて学ぶ（テントを張り、火をおこし、炊飯する）

班毎に8人用の大型テントを張る。共同作業により共通の目標（住の確保）を達成することの体験的学習をした。作業の分担についても体得。

火を起こす。原始の時代、人間が習得した火を起こしこれをつかうという技術を一人一人が新たに発見し、体験した。火おこし術、かまどづくり、薪の組み方等を学習。班ごとに釜で米を炊き、カレーを作った。「料理する」ことの意味について考えた。食を創る喜びと愉しさ、「料理はココロである」ことを体験的に学習した。

④ むすびを作る

三日目の朝食後、きのこ取りのための昼食用に、各自でむすびを作った。きわめて単純な食べ物であるが、それだけにむすび手の個性が現われた。おいしいおむすびのつくり方の秘密について探った。

⑤ きのを採る

古代から人間の生活にとってもっとも身近かで重要な自然の代表であった森（山）に分け入り、森とは何かを探る。森（山）歩きは、文明病に病んだ人間にとって、人間が本来的に具有しているはずの動物的生命力や感覚を回復するのにもっとも有効な方法である。森（山）は、動物、植物、虫、菌類、岩、土、水、ガス等凡ゆる生命体、非生命体の集合体であり、「共生社会」の典型である。きのこを対象を限定して、森（山）との接触をはかったのであるが、このことを通して、生命体の循環、生態系の関連、「共生社会」についても学習することとなった。

⑥ きのこ汁を作る。生きた魚（にじます）を塩焼きにする

班毎に自分たちで採取したきのこできのこ汁をつくった。多種類の食材（白菜、ねぎ、里いも、豚肉、とうふ等）を用いたことや釜での飯たきもあり、グループ内での作業の分担、協同が必要となった。どの班にも同種・同量の食材が分配されたので、期せずして、

班対抗きのこ汁コンクールの様相を呈した。

また、一人一尾宛、生きのよにじますが配分され、各自自分の分は自分でさばいて、串（木の枝で手づくりのもの）に刺して塩焼きを作った。生きている魚の生命を自分の手で断つ、という体験により、人間は他の生物の生命によって生かされているという事実を学習した。

⑦ キャンプファイヤーを愉しむ

夕食後、キャンプファイヤー広場で、全員でキャンプファイヤーを盛大に燃やし、打ち上げコンパを愉しんだ。

「祭り」の意味、「祭りづくり」について学習した。

⑧ テントの撤収作業とキャンピングサイトの掃除をした

後片付け、清掃作業を全員で協同して行なった。協同することの意義を体験的に学習した。

3 学生たちは「合宿ゼミナール」から何を学んだか

本ゼミナールの最後に（四日目午前中）レポートを書いて提出させた。レポートの課題は①あなたにとってコミュニケーションとは何か、②合宿ゼミについて、である。その中からこのゼミナールから学んだことは何であったのか、特徴的な見解を以下に抜粋して列挙することとする。

- このゼミは、共同と協同の生活で明け、そして暮れた。その中ではつねに誰かとのコミュニケーションが必要不可欠であった。コミュニケーションの重要性を新めて認識させられたが、この当然のことを他のどんな講義からよりも深く教えられた。（L. 男子）
- このゼミでは、そば作り、きのこ採り、星の観察、キャンピング、生きた魚の料理など、これまで体験したことのない貴重な事を、初めて知り合った仲間達と行なった。その中でさまざまなコミュニケーションについて知ることができた。コミュニケーションは、人間同士の間だけではなく、人間と他の物との間にも必要不可欠のものであり、とても重要なものであり、“共存”の土台となるものだということが分った。日常性の中で、ともすれば忘れがちなこのことに気づかされた点にこのゼミの大きな意義があると思った。（T. 男子）
- この合宿では、消費のよろこびというより生産のよろこびにたいする関心の割合合いが大きかったと思う。今まで何とも思わず食べていた魚を自からさばいたり、そばを苦勞して作ったり、このような体験から、これからは、食べ物を無駄にできないような気がした。一番よかったのが、一緒に苦勞した人たちと友だちになれたということだ。（S. 男子）
- この合宿では、日ごろ馴れ親しんでいる日常生活とはまったく異なる場所で、異なる条件とスタイルの生活を過ごすことで、このわずか数日間の内に自分が変わったと実感した。視野が広がり、これまで見えなかったいろんなものが見えるようになった。人だけでなく森や星とのコミュニケーションを体験することで変わったのだと思う。それ故、コミュニケーションとは、人間を変える道具である、といえる。（T. 男子）
- 私にとって一番の収穫は、少年自然の家を取り囲む自然とのコミュニケーションであった。朝のすがすがしさや、木立の上に広がる空の青さ、そして何ととっても夜空の満天の星の

素晴らしさには、このところ忘れていた感動を味わった。本当にあんなにきれいな星空を見るのは初めてで、これが「降るような」「満天の」星空なのだと、空を見上げながらしばらくじっとたたずんでいた。空を見ている内に何だか自然にいろいろな想いや感情が詩のようにこみあげてきて、人間というのは無条件に星にロマンを感じるものだと、つくづく思った。(E. 女子)

○一日目の夜、施設の天文台を使った星とのコミュニケーションを体験した。人間は宇宙から膨大な情報を得ている。しかし、人間は宇宙から一方的に情報を得ているだけである。人間の側からもそれに答えてはじめてコミュニケーションが成り立つのだと思う。例えば、話題になっているオゾン層の破壊、長い間地球上の生物を護り続けてくれた地球が、人間側に対して答えを求めてきているのだ。これに人間は応えねばならない。人と人の関係がコミュニケーションによって良くも悪くもなるように人間と地球の関係も同じである。このままでは人間は早晚見棄てられてしまうだろう。地球の問いかけに人間は応えるべきだと思う。(S. 男子)

○私はこの合宿ゼミに参加して先ず気づかせてもらったことは、コミュニケーションの相手は人間だけではないという事だった。とんぼが手にとまってくれたり、名も知らぬ花を見つかけたり、雲の流れるのを見たり、星空を眺めたりする時、なんとなくホッと、うれしくなっていた。そしてこれが自然という相手とのコミュニケーションなのだと自分で納得していた。普段は、このようなことを感じたり、考えたりしたことがなかった、ということに気づかされたのです。また、このゼミでは、感動は与えられるものではなく、自分で動いて見つけるものだという事にも気づかされました。そして、大切なことは「気づく」ということだということに気づきました。(T. 女子)

○私はクモが大嫌いでした。そしてこの合宿できのこ採りです。まさかあんな林の中をかき分けて行くとは思ってもみませんでした。最初の内は、林のいたるところで待ちかまえていて顔にまとわりついてくるクモの巣がすごく嫌でした。ところが、いつの間にかきのこ採りに夢中になってしまい、知らず知らずのうちにクモの巣を平気でとり払うことができるようになっていました。すると何故かこれまであれほど強かったクモに対する嫌悪感が不思議なことに消えてしまいました。そして、これが自然とのコミュニケーションなのだとなと自分で納得できました。(A. 女子)

○私はもともときのこ類に好感がもてない性質で、きのこ取りには関心がありませんでした。ところが班の仲間はきのこ取りに夢中になり、私はいつの間にか一人だけ道にとり残されてしまいました。淋しくなって私も森の中に踏みこんだのですが、その時大きなきのこに直面してしまったのです。おそろおそろ眺めるとそれは紛れもなく先生に教えていただいた食べられるきのこです。周りには誰もいず、やむをえず勇気をふるいおこして自分の手でとったのです。手にとって眺めるとスーパーで袋づめになっているきのこは全く違って実に特徴のあるきのこに見えました。こうして私は生まれて初めて、きのこことコミュニケーションをした様な気分になりました。あとで考えて、なぜこんなことが出来たのかとても不思議です。何かは具体的には分かりませんが私の何かが変わったのだと思います。これがこのゼミで私にとってもっとも印象的なことでした。(A. 女子)

○自分で生きた魚をさばいてみると、自分が生き物の命を奪って生きているということが本

当にやっとなんか気がした。魚の抵抗力は強くて最後まで魚と戦っているような気持ちがあった。魚のお腹を切っていくときはすごく恐くて、魚を殺す自分の手が嫌で、苦しむ魚を見ているのも気持ちが悪かった。ニジマスと一対一で向かい合って戦い、そして命をもらって生きていることを忘れちゃならないと思った。(人文、女子)

○自分で生きている魚の腹を切って腹わたを取り出すというのは見ていたことはあっても、実際にやったことはありませんでした。他の人にやってもらおうかと思いましたが、自分で食べるからには自分の分は自分の責任でやるほかはないと観念し腹をきめてやりました。今までは魚の切身を見てもおいしそうとくらいにしか感じたことがなかったのに、このようにして誰かが生きた魚を必ず殺しているのだということを考えると、人間は動物や魚を殺して生きているんだということが初めて実感することができました。このことを通して、生き物の生命^{いのち}についてあらためて考え、人間は無やみに生命を殺してはいけない、人間が全てではない、人間は“自分だけの為”という考えではだめなんだということが分かりました。(F、女子)

○このゼミで一番良いと思ったのは他学部生との交流ができたことだ。他の共通教育の授業は、たしかに他学部生と一緒に受講してはいるが、交流するということはない。この点、このゼミでは、3泊4日全ての生活を他学部の人と共にすることで、私の人間の輪がぐんと広がり、これからの信大での生活がより楽しくなると思う。またこのゼミの企画の全てが私には初めての経験で、貴重なものであった。

天体望遠鏡をのぞくのは初めてであったが、木星や土星を自分の目で確認した時は感動した。プラネタリウムでの話しの中で「あの星はもしかしたら今はもう無いかも知れない。そうすると光だけを今、この目で見ていることになる。それだけ遠いということだ」という言葉はとても印象的だった。すると、星の光とのコミュニケーションは、時間とのコミュニケーションということになるのかと思った。

きのこ取りでは、それを通して森の中にあんなに多くの植物や虫を見つけられたことは新鮮な驚きであった。森を肌で実感できたように思う。そば打ちも初めての経験で、そば粉がどんどん変わっていくのが面白かった。簡単なようで意外と難かしかったので出来上がった時は嬉しかった。出来はまいちであったが、皆で作ったものを皆で食べたということに満足感があった。これは、カレーやきのこ汁作りにも言える事である。苦しいことを皆で分かち合い、そして喜びも皆で分かち合うという3泊4日の共同生活は、私にとってたいへん貴重な体験であった。このような授業を選択してほんとうに良かったと思う。(F、女子)

4 学生たちは授業をどう評価したか

「合宿ゼミナール」というユニークな授業を受講生は、どのように評価したのか、レポートの中から目についた意見をいくつか紹介しておきたい。

○信州の豊かな自然と触れ合うことは、現代の生活に慣れきっている私にとって初めてで新鮮な体験となったものが多く貴重なものであった。今回、この授業に参加できて本当によかったと思う。信州大学は豊かな自然に恵まれているのでそれを生かした授業をこれからもどんどん行って欲しいと思います。(L、女子)

- このゼミはとても良かったと思う。机に座って教授の話聞き、黒板に書いてあることをノートに写すだけが勉強ではなく、きのこを取ったり、星を観たり、キャンプをする中でコミュニケーションをキーワードに皆で考え話し合い答を出すことも勉強だということを感じ取ることが出来た。今後もこういう授業を増やしていくことで暗記することが勉強だと思っている人を減らし、多角的に物を見て考える人間づくりを行うことが必要だと思う。(L. 男子)
- この合宿ゼミでは、単に人間同士の会話としてのコミュニケーションだけでなく、星とのコミュニケーション、自然とのコミュニケーション、そしてその一環として人間と食について考えることができて良かったし、新たな発見や見方を持つことができた。神秘的な星空を見て自然の大きさ、偉大さを身をもって感じる事ができた。(L. 女子)
- この合宿ゼミナルに参加したことでコミュニケーションとはどういうことを体で学ぶことが出来たと思う。大学一年の夏期休業の終りに大変貴重な経験が出来て得した気分になった。(T. 男子)
- この合宿ゼミナルの良い点はたくさんある。まず第一に、自然という慣れない環境の中で生活することだろう。それと、友人をたくさん作る事ができたことだ。この二つは特に素晴らしいと思う。私は今回のゼミで自然と宇宙について興味を持った。この興味をこれからもっと追求したい。(T. 男子)
- 私は、いろんな面で充実してこのゼミを終ることが出来てとても良かったと思う。来年もこんなゼミがあったらいいなと思っています。(A. 女子)
- とにかく、この合宿ゼミで感じたのは、小中高と行ってきたこれと似かよった野外授業より自分たちでやったという感じがとてもしたことで、それが楽しくとてもよかったと思う。(A. 男子)
- キャンプや集団で生活することを楽しいと思う人は勿論だが、家でゴロ寝が一番という人たちにこの合宿ゼミに参加することを薦めたいと思う。(F. 女子)
- 始めは合宿するだけで単位がもらえるなんて、オンの字だと思っていたけど授業というのを忘れるぐらいいろんな経験ができたので単位以上に得るものがあったと思う。机の上だけの勉強ではなく、友達と人間としてもっとも本質的なスタイルで共同生活をする事がより意義のある大切なことだと思った。(L. 女子)
- 合宿ゼミはすごく面白かった。どれもなかなか自分でやらない事だから、このゼミは貴重な経験だと思う。普段いかに人間中心の生き方をしているかがよく分かった。そば打ちも、きのこ取りもカレー作りもめったにやらないことをやる楽しさというものもあったけど班でまとまって会話しながらやっていったのがなにより楽しかった。(L. 女子)
- 本ゼミが第一回で終了する事なく、今後本大学のみならず他大学にも拡大し、より良い社会環境創りの礎となる事を期待したい。(E. 男子)
- オープンでフリーな合宿ゼミナルに他のゼミや講義にない貴重なものを感じ得ました。この記念すべき第一回の人々の輪が今後何らかの形で永く継続され、来年以降の合宿ゼミナルの指導員もしくはサブとしてボランティア的に参加し、育つことを期待します。(E. 男子)
- 初めての貴重な体験がたくさんできて良かった。仲間との共同生活は、一人ぐらしに慣れ

ている僕にとって予想以上に楽しかった。いろんな学部の人と一緒にだったことも良かったと思う。このようなゼミは、これからも続けて欲しいと思う。(K. 男子)

- もっとも感動したことに、全ての人が自然に協力し合って仕事をしていたということがある。それが体験できることがこのコミュニケーションをテーマとした合宿ゼミでもっとも意義のある点だと思った。(S. 女子)
- コミュニケーションは大切なことであるということを学ぶ場として大変良かったと思います。このまま毎年この授業を続けていって欲しいと思います。
- この合宿ゼミナールは、これからもずっと続けて欲しいと思う。(T. 男子)
- 合宿ゼミナールはすごくいい授業だ。いつもと違う自分を見ることができる。これからも続けて欲しい授業の一つである。毎日が充実していない人におすすめの授業である。合宿ゼミナールに本当に感謝しています。(T. 男子)
- 先生方も親切で施設もしっかり整っていてもう一度とりたいたいと思わせるような本当にいい授業でした。(T. 男子)

この授業にたいする改善点や注文点についても多く述べられているが、それらの主なものをまとめると以下のようなものである。

- 初の授業の試みということで、試行錯誤の面も多くあると思う。先生は、ひとりで仕事のし過ぎだと思う。もっと全体に指示を出しつつ仕事をした方がよいと思う。かといって仕事をせず指示ばかりしていると生徒から不満の声もあがるだろうから、そこが指導者としてむずかしいところだと思う。あと調味料をもう少し増やした方がよいと思う。(T. 男子)
- キャンプの際、一つのテント当りの人数が多すぎる。持ち物に防寒着の持参をはっきり促すべきである。調味料がもっと欲しかった。事前に自己紹介をしたり、ゲームをするなどしてお互いが知り合うことを考慮すべきだ。(T. 男子)
- 事前に2回ほどのガイダンスを行なうべきだと思う。全員がある程度進行過程のみこんでいれば、先生や係の人たちだけが動きまわるといこともなかったと思います。各班の班長にもっと主体的に行動の責任をもってもらうようにすれば、もっときばきとした行動がとれたのではないかと思います。(T. 女子)
- 中途半端な空き時間が多かったように思います。空き時間を作るならまとめてどこかで取るようにしたらよいと思う。半日か1日くらいのフリーな班別行動のプログラムをいれたらどうでしょうか。お米は多すぎたがお酒は少なかったと思う。(E. 女子)
- 全体的に今一つ締めりが無いような印象があった。学生にもう少しリーダーシップをとらせたりもっと自主性をもたせた方がよいのではないかと思います。(E. 女子)
- テントが寒かった。時期をもう少し早めた方がよい。班編成はもう少し小人数の方がよい。食材が少なすぎる。少なくともニンニクとショウガは欲しかった。(T. 男子)
- 参加人数はもう少し少した方がよいと思う。内容がもっと濃いものになったと思う。(E. 女子)
- 学生の自主的運営をもっと取り入れてほしい。班ごとのディスカッションの時間がもっとあった方がよい。「小集団討論」が、シラバスに詠われていたが、不満であった。一日

10～15km程度のトレッキングをプログラムの中にとり入れたらいかがでしょう。(E. 男子)

5 授業の総括と提言

以上の受講生のレポートの内容を分析検討すると、次のように総括できる。

シラバスに記載された授業の狙い、「人と人との触れ合い、人と自然との触れ合いを通して、もっとも本質的な人間性を涵養し、自立と共生について考える」は、ほぼ期待どおりの成果をあげたと云ってよいであろう。

また、「キャンプと野外炊飯による共同生活を基本とし、講義と演習、フィールドワーク、実習を併用し、小人数による対話と討論を通して」行なわれた授業方法についても、予想以上に好評で、十分効果的であったと評価してよからう。

個々の学生にとって、夫々程度の差や対象とするプログラムの内容の違いはあっても、星の観察、そば打ち、キャンプ生活、きのこ取り、生きた虹鱒を料理すること、といった企画に対しては、ほぼ全員が、強烈なインパクトを与えられ、貴重な体験となったことを記している。

以上を総括すると、本学の特色ある授業のひとつとして、今回試みられた「合宿ゼミナール」は、共通教育の中に正式に組み込まれるに十分値いするものと判断し、今後、なるべく早い時期から本学の共通教育のカリキュラムの中で実施することが望ましいと提言したい。

「合宿ゼミナール」の実施に当っては、信州大学共通教育センター企画調査係、共通教育第1・2係及び「高遠少年自然の家」の職員のみなさんからたいへん好意あるご協力をいただきました。とくに、久保田達夫氏からは貴重なご助言をいただきました。また中島健一、奥原頼房両氏には全期間を通じて全面的なご協力をしていただき、本ゼミナールの成功に貢献していただきました。ここに記して心から感謝を申し上げます。